

2018年7月13日

### 博士学位審査 論文審査報告書（課程外）

大学名 早稲田大学  
研究科名 大学院人間科学研究科  
申請者氏名 関口 広次  
学位の種類 博士（人間科学）  
論文題目（和文） 中国陶磁窯址の考古学的研究  
論文題目（英文） An Archaeological Study of Chinese Ceramics Kiln Sites

#### 公開審査会

実施年月日・時間 2018年6月25日・16:30-17:30  
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室

#### 論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	谷川 章雄	博士（人間科学）	早稲田大学	考古学
副査	早稲田大学・教授	森本 豊富	Ph. D. (Education)	UCLA	文化人類学
副査	早稲田大学・准教授	原 知章	博士（文学）	早稲田大学	文化人類学
副査	早稲田大学・准教授	余語 琢磨	文学修士	早稲田大学	考古学

論文審査委員会は、関口広次氏による博士学位論文「中国陶磁窯址の考古学的研究」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

#### 1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 「原始青磁」の製品化の実態についての質問があり、発掘調査の事例にもとづく説明があった。
- 1.2 「天井のない窯」において、半坡遺跡の新石器時代の土器窯からのちの北方系の饅頭窯へのつながりについての質問があり、現段階で発掘事例によって判明している事実にもとづいた説明があった。
- 1.3 ムライト化する温度についての質問があり、申請者の見解が示された。
- 1.4 申請者の東アジアの窯業史研究の今後の展望についての質問があり、これまでの日本の窯業に関する研究をまとめるつもりであるという回答があった。

1.5 以上のように、公開審査会において行われた質疑応答では、申請者は質問に対して適切に回答していたことが認められる。

## 2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 「序論」に本論文の研究史上の位置づけを若干加筆すること。

2.1.2 各章末に付記された文章の中で不要な箇所は削除し、必要な箇所は記載する場所を変更すること。

2.1.3 「結語」のまとめの文章を若干加筆すること。

2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1 「序章」において、従来の中国陶磁の研究は陶磁器自体の研究が中心であり、窯址の研究は乏しく、中国陶磁窯址の発展過程と系譜に関して、生産された土器・陶磁器の関係において総括した研究はこれまでなかったことを加筆した。

2.2.2 各章末に付記された文章の中で、次章とのつながりなどを述べた不要な箇所は削除し、その後の研究成果など必要な箇所は本文中もしくは補注に含めた。

2.2.3 「結語」のまとめの部分に、本論文の結論である中国陶磁窯址の発展過程と系譜関係を要約して加筆した。

## 3 本論文の評価

3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は中国の土器・陶磁器を生産した窯址の歴史を明らかにしたものである。具体的には、発掘された窯址の事例を中心にして、新石器時代から明・清に至る長い中国陶磁の窯業史を俯瞰して、窯の構造とそこで生産された土器・陶磁器の関係に注目しつつ、窯址の発展過程と系譜関係を論じることを目的としている。技術史上で窯業は土器の生産が開始された新石器時代以降の長い歴史を有し、その中で東アジアの窯業の中心であった中国陶磁窯址研究は重要な位置を占めている。こうしたことから、本論文の研究目的は明確であり、かつ妥当なものであると言える。

3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文において分析対象とした、発掘された窯址および窯道具、そこで生産された土器・陶磁器の事例は、考古学的方法によって分析され、合わせて土器生産の民族事例や陶磁器生産に関する文献資料の分析による成果も加えられている。こうした本論文の方法論は、歴史考古学においてあるべき総合的叙述の方法にもとづくものであり、明確かつ妥当なものと判断される。

3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、窯とは「炎を最大限高温に保持する空間の施設」と定義され、土器から磁器への発展の背景には、材料が高温に耐えられるようになり、窯の天井を常設の堅固な構造にして高温を可能にする技術革新があったという視点に貫かれている。そして、中国陶磁窯址の発展過程と系譜関係は、①新石器時代の土器を生産した「天井のない窯」に始まり、それは南方を

中心にした龍窯、北方を中心にした饅頭窯に発展した。②龍窯と饅頭窯は宋代に景德鎮で融合して葫芦形窯あるいは鎮式窯を生み出して元青花の生産を行い、一方清朝期の色絵窯は上絵専用の低火度窯であったという。こうした本論文の成果は、申請者の中国陶磁窯址に関する 20 篇の論文の蓄積によって到達した結論である。以上のように、本論文の成果は、膨大な資料に立脚した明確な論旨に貫かれており、妥当なものと判断される。

3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1 従来の中国陶磁の研究は陶磁器自体の研究が中心であり、窯址の研究は乏しかった。中国陶磁窯址を総括的に取り上げたものには、わずかに熊海堂『**东亚窑业技术发展与交流史研究**』（南京大学出版社 1995 年）があるが、本論文のように生産された土器・陶磁器の關係に注目して、中国陶磁窯址の發展過程と系譜關係を総括的に論じた研究は皆無である。

3.4.2 中国陶磁窯址の資料は、実見して自由に分析することが難しい外国の資料である。しかしながら、本論文には、日本国内に所蔵されている小山富士夫の定窯採集片、米内山庸夫採集の南宋官窯の窯道具や陶磁器や、沖縄県石垣市シタダル海底遺跡出土資料を、申請者が詳細に観察・記載、分析を通して得られた重要な知見が盛り込まれている。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 中国陶磁窯址の發展過程と系譜關係について、生産された土器・陶磁器の關係に注目しつつ、総括的に論じた初めての研究であること。

3.5.2 中国陶磁窯址は東アジアの窯業史の中心的存在であり、今後日本を含めた周辺地域の窯址研究の基準となるものであること。

3.5.3 窯業は新石器時代の土器生産以降の長い歴史を有しており、人類の技術史の解明において重要な研究課題であること。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 人間科学における物質文化研究の一つの方向性である技術史研究の重要性を提示したこと。

3.6.2 考古学的方法に加えて民族事例や文献資料の知見を加えて行われた研究であり、人間科学における物質文化研究の総合的方法の一つを示したこと。

4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

#### 学術論文

関口広次「『天井のない窯』の話」佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集編集委員会編『佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集』燎原 1983 553-577 頁

関口広次「龍窯について」今井敦編『中国の陶磁 4 青磁』平凡社 1997 136-142 頁

関口広次「原始青磁と青磁」東洋陶磁学会編『東洋陶磁史-その研究の現状-』東洋陶磁学会 2002 26-34 頁

関口広次「カシュガルの土器造り」佐々木達夫先生退職記念事業実行委員会編『考古学と陶磁史学-佐々木達夫先生退職記念論文集-』金沢大学考古学研究室 2011 1-22 頁

関口広次「近年の景德鎮における元青花研究から」佐々木達夫編『中国陶磁 元青花の研究』高志書院 2015 117-134 頁

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上